

「メンズリブ研究会」のこと —— 味沢 道明

1990年、フェミニストの集會に何人かの男たちがパネリストとして参加しました。いずれの男たちも、フェミニズムとはなんらかの関わりを持ちながら活動してきた者ばかりです。その男たちは、いくらフェミニズムと関わろうと、「男であるということ」は女性のフェミニストと同列の運動は不可能であるということ、ほとんど無意味であるということに思い至ったのです。フェミニストと言葉を同じくして男を糾弾するのではなく、自らが立つ男という存在に目を向け、第一の性、抑圧する性として造られる、男の問題を考えようということになりました。

91年、「男らしさって何だ」というシンポジウムを開き、以後、2カ月に一度の割で例会と通信「メンズネットワーク」を発行しています。

例会には、研究会としての機能と相互カウンセリングを目的とした面を持たせていますので、3時間半という時間をあてています。当初から例会には女性の参加はお断りしています。この点に関しては色々な意見も聞かれるのですが、とりあえずは対立や糾弾の場にするのではなく、男がそれぞれ、なぜ?という言葉をも自分自身に向けてみる場を作ろうということになったのです。多くの男は競争や対立のない場があるがままの自分が許される関係を知らずに育ってきたのですから、例会に集まる男たちの人生や価値観はすべて異なります。一つの結論とか、方向性とかも例会には必要ないだろうということで一致しています。

今までの例会で、男らしさ、男の暴力性、家制度の重圧、学歴の問題、扶養の義務、セクシュアリティ、売買春、等などについて、話し合われてきました。そしてそれらについて、共通の問題の根があるのが見えてきました。女が女に育てられるように、男も男に育てられるということ。個性を抑圧し、女や弱者を抑圧することでかろうじて自己を支える弱い人間に育てられてしまうということ。一見男は強く能力もあると認識されやすいけれど、これは社会の作り出す幻想にすぎないのです。女は優しく美しい、という誤解の裏返しでしかありません。支配し所有する存在としての自己確認ができなくなる時、男は自らのアイデンティティーに不安を感じます。そのとき第一の性であることを確認する心理作業として、

男のステロタイプの行動をしてしまいます。ケンカも勉強も出世も家庭内暴力もレイプも根はすべて同じものです。が、それによって自己の多様性はより深く抑圧され傷ついてゆきます。やっかいなことに本人はもちろんのこと周りのだれもそれに気付いていません。暴力を振るわれる者の痛みや傷は理解され易いのですが、暴力を振るう者の心の傷については誰も気付きません。暴力やめると訴えられて自己を否定されれば、よけいに暴力を振るわなければ、自分が保てないのです。フェミニストの言葉が通じにくいのはこちらへんの問題があります。まず男が自分の弱さを自分で認めてあげる作業から出発しなければ、抑圧者からおりようとはできません。単にフェミニズムのコトバを覚えただけでは知的抑圧者となるばかりです。女にフェミニズムを説教する男が増えてもなんにもなりません。

ここ20年程の世界の動きはめまぐるしいものがありますし、日本の女たちも随分意識や行動が変化したようですが、日本の多くの男たちは旧来の価値観やライフスタイルを変えられずにいます。このギャップの拡大が個々の人間関係にも反映し、家庭や職場などでの人間関係がこじれてしまうケースも増えてきているように思います。被抑圧者としての女にはそれなりに助け合う人間関係やサポートする組織も増えつつありますが、抑圧者とししか見なされにくい男は、本人の無自覚に加え、それを気付かせる機会も気付いた後にサポートする組織もありません。これでは本人はもちろん、周りの人も快い人間関係は望むべくもありません。荒んだ人間関係は世代を越えて伝えられ、拡大してゆきます。だれにとっても住み辛い社会になってしまいます。幸い日本にはまだまだいたわりや優しさが残されています。これがなくなる前に男たちの抱える問題を理解し、個々の男たちが男らしさの縛りからとき放たれ、人間らしい人間として豊かに生きてゆける社会にしてゆきたいと思うのです。

というわけで、私達メンズリブ研究会では、これからも例会を大切な場として続けて行くとともに、有志のメンバーが「電話相談」という形で、暴力や性、人間関係等に悩む男たちに、共に悩み、痛みと共に感じあえる機会を、ささやかながらも提供してゆくことにしました。私達の思いを理解し、ご賛同ご協力いただけますようお願いいたします。